

へボノ木遺跡

－ 第74次発掘調査報告 －

Hebonoki Site

－ A Report of 74th Excavation －



令和4（2022）年3月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。市内には先人達の残した文化遺産が数多く残り、その究明が進められております。

今回の調査は、東合川三丁目で実施しました。遺跡の南東部の調査で、縄文時代や弥生時代、古代、中世の遺構を確認し、過去の調査で見つかった遺構や、遺物の広がり把握することができました。これらの成果が地域史の研究や、久留米の歴史や文化財保護に対する市民の理解に貢献できれば幸いです。

なお今回の発掘調査に際して、土地所有者の辻俊夫様をはじめ近隣住民の皆様にも多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和4年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 井上 謙介

例言

1. 本書は、令和3年度に辻俊夫氏の委託を受けて共同住宅建設に先立ち実施した、ヘボノ木遺跡第74次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査の略記号はHBN-074、調査番号は202107である。
3. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化財文化財保護課の西拓巳が担当した。
4. 遺構配置図・個別遺構図のいずれも、座標は国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基に作成し、方位は座標北を示す。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正は行っていない。
5. 遺構配置図は、西と発掘作業員の舟越朝菜、山口誠也がトータルステーションで作成し、株式会社CUBIC製の「遺構くんcubic」で編集・保存した。
6. 遺物出土状況は西が水系メッシュ法（1/10）で作成し、発掘作業員の進上裕永と宮原眞助が補助した。
7. 遺物実測図は、土器と陶磁器を西と出土品整理作業員の古賀和子、古賀啓子が作成し、石製品を職員の小川原励が作成した。拓本は出土品整理作業員の古賀啓子と田中千佐子が作成した。
8. 遺構・遺物実測図の浄書は、西と文化財整理員の今村理恵、出土品整理作業員の山元博子、湯川琴美が米国アドビ製の「Adobe Illustrator」で行った。
9. 土層と遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（日本研事業株式会社、昭和42年）に準拠した。
10. 写真撮影はデジタルカメラで行い、遺構写真はCanon EOS 6Dで、遺物写真はリコーPENTAX K-1 IIで西が撮影した。上空からの写真撮影は、有限会社空中写真企画に委託した。写真は掲載にあたり、米国アドビ製の「Adobe Photoshop」で編集した。
11. 遺構の略記号は、SⅠ-堅穴住居、SK-土坑、SP-ピット、SX-その他の遺構を示す。
12. 出土遺物や図面、写真などの記録は、久留米市埋蔵文化財センターで收藏・保管している。
13. 本書の執筆と編集は西が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
1. 基本層序	4
2. 検出遺構	4
3. 出土遺物	11
IV. 総括	22

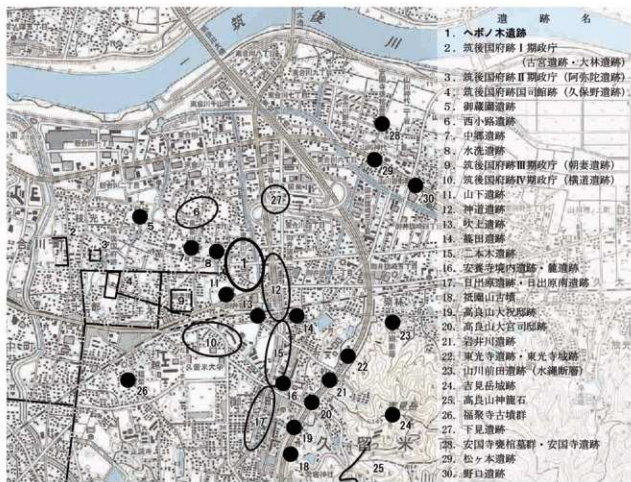
図版目次

表紙図版 調査地点上空から望んだ高良山（北西上空から）	表紙
第1図 周辺遺跡分布図（1/25,000）	目次
第2図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	3
第3図 ヘボノ木遺跡第74次調査遺構配置図（1/150）	4
第4図 調査区全景（南上空から）	5
第5図 S I270完掘状況（北西から）	5
第6図 S I270土器出土状況（西から）	5
第7図 S I270実測図（1/40）	6
第8図 S P160土器出土状況（南から）	6
第9図 S X 2 検出状況（南西から）	6
第10図 S X 3 検出状況（北から）	6
第11図 S P160、S X 2・3実測図（1/20）	7
第12図 S K161石英出土状況（南東から）	7
第13図 S K161・250・300実測図（1/40）	8
第14図 S K250遺物出土状況（北東から）	8
第15図 S K300完掘状況（南から）	8
第16図 S P275・305、S X 1 実測図（1/20）	9
第17図 S P275土器出土状況（西から）	9
第18図 S P305土器出土状況（北西から）	9
第19図 S X 1 上甕出土状況（南東から）	10
第20図 S X 1 下甕出土状況（南東から）	10
第21図 S K230・240完掘状況（北東上空から）	10
第22図 S K320完掘状況（東から）	10
第23図 S K230・240・320実測図（1/40）	11

第24図	出土遺物実測図1 (1/4、1/2)	12
第25図	出土遺物実測図2 (1/4、1/2)	13
第26図	出土遺物実測図3 (1/4、1/2)	14
第27図	出土遺物写真1	17
第28図	出土遺物写真2	18
第29図	出土遺物写真3	19
第30図	出土遺物写真4	20
第31図	出土遺物写真5	21
第32図	へボノ木遺跡南東部・神道遺跡主要遺構図 (1/1,000)	23

表 目 次

第1表	出土遺物観察表1	15
第2表	出土遺物観察表2	16



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

I. はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。令和2年（2020）7月30日、土地所有者の辻俊夫氏から、久留米市東合川三丁目257番1における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の埋蔵文化財包蔵地であるへボノ木遺跡の範囲内であり、10月16日の確認調査でも、地表下1.1mで遺構面を確認した。建築計画では対象地に盛土が施されるが、建物の杭が遺構面に及ぶため、発掘調査が必要である旨を回答した。

令和3年（2021）3月25日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、土地所有者と久留米市長は4月13日付で「へボノ木遺跡第74次調査発掘調査委託契約書」を締結した。現地での発掘調査は4月19日から5月29日まで実施し、整理作業と報告書作成は令和4年（2022）3月31日まで西町文化財整理事務所で実施した。対象面積は1,591㎡、調査面積は住宅部分の258㎡である。

2. 発掘調査の体制

調査委託：辻 俊夫

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：久留米市 市民文化部

文化財保護課

教 育 長：井上 謙介

部 長：竹村 政高

次 長：深堀 尚子

課 長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼課主査：白木 守、丸林 禎彦

主 査：水原 道範

事務主査：小澤 太郎、江島 伸彦

庶務担当：市村久美子、箔谷 綾

事前確認担当：熊代 昌之

発掘調査・報告書作成担当：西 拓巳

発掘作業員 青木佐智子、池尻 忠行、石橋 康子、大倉隆太郎、鐘ヶ江 清、川野 洋之

久保田英嗣、進上 裕永、原 学、舟越 朝菜、本荘 郁子、宮原 真助

村田 雅巳、本村美奈子、山口 誠也

3. 調査の目的と経過

今回の調査は、へボノ木遺跡の南東部の様相、特に隣接する第47次調査地点で検出された、縄文時代や弥生時代、古代の遺構の分布を把握するために実施した。令和3年4月19日に調査器材を搬入し、21日から重機で調査区の表土剥ぎを開始した。地表下約1.1～1.5mで遺構面に到達し、23日まで表土剥ぎと排土整理を行った。この間、4月22日から発掘作業員を投入して遺構検出を行った。各遺構の掘削や撮影、測量などの記録作業は4月28日から始め、5月26日にドローンを用いて調査区全景を撮影した。空撮後、5月28日から重機で調査区の埋め戻しを開始し、5月29日に埋め戻しと器材の撤収を完了して、現地での発掘調査を終了した。

II. 位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部に位置し、筑後川の中・下流域に面する。久留米市の南東部に聳える耳納山地の西端には、高良山や明星山、飛岳といった標高200～300mの山地が位置する。表紙図版のとおり、高良山からは北西に向かって丘陵が派生しており、標高を減じながら段丘崖を経て、筑後川左岸の氾濫原に至る。ヘボノ木遺跡はこの丘陵の北部、南を段丘崖に、東西を中谷川と井田川に挟まれた、標高約13～14mの低位段丘の上に位置する。

ヘボノ木遺跡における人類の足跡は旧石器時代まで遡り、ナイフ形石器が表採されている。縄文時代には、横道遺跡で草創期まで遡る土器が出土したほか、大林遺跡やヘボノ木遺跡、山下遺跡、水洗遺跡、篠田遺跡、吹上遺跡、安国寺遺跡、松ヶ本遺跡、野口遺跡で土器や石製品が出土した。また、横道遺跡では早期の土坑や集石遺構、朝妻遺跡と神道遺跡で埋甕、西小路遺跡で竪穴住居と土坑群、篠田遺跡と野口遺跡で土坑が確認され、高良山の麓から筑後川にかけて集落があったことを示唆する。西小路遺跡で出土した石棒や石冠は、精神文化や東日本との交流を考える上で注目できる。

弥生時代には、第47次調査で夜臼式土器の埋設遺構が検出されたほか、ヘボノ木遺跡の南部で中期後半の竪穴住居が分布する。火災痕跡を有する竪穴住居もあり、丹塗土器が出土する祭祀土坑を伴うのが特徴である。中期後半の集落遺跡は、大林遺跡や久保野遺跡、朝妻遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡でも見つかっており、中谷川の対岸には安国寺甕棺墓群があることから、さらなる集落の存在が示唆される。後期後半には、古宮遺跡と大林遺跡でV字溝を伴う竪穴住居群と甕棺墓が検出され、鏡片や鉄鏃が出土した。同時期にはヘボノ木遺跡でも竪穴住居が見られ、楽浪系土器(注1)や銅鏡片、素環頭刀子が出土したほか、朝妻遺跡では舶載鏡の破鏡が出土した。台地西端の大規模な集落の東方に、中郷遺跡や朝妻遺跡、ヘボノ木遺跡といった比較的小規模な集落が点在する様子が窺える。

古墳時代には、弥生時代終末期の甕棺墓を伴い、筑後地方最古の古墳と考えられる祇園山古墳や、方墳群である福聚寺古墳群が造営される。

古代に入ると、高良山に神籠石式山城が築かれる。その築造年代は明らかではないが、白村江の戦により対外防衛の必要に迫られた7世紀頃に築かれたと考えられている。高良川沿いの丘陵西端でも、同時期の大型建物や大溝が検出されており、国府設置前の公的施設(いわゆる「前身官衙」)とされている。前身官衙は7世紀末までに成立した筑後国の国府に継承されたとみられ、古宮地区には築地塀を伴う建物群がみられる。筑後国府跡や神道遺跡、山川前田遺跡では、この時期に比定される断層や噴砂痕が確認されている。『日本書紀』巻第二十九には、天武天皇七年(678)12月に筑紫国で大地震が起きたという記述があり、耳納山地北麓の水縄断層が震源とされている。これらの地震痕跡は、この「筑紫地震」の影響と考えられている。

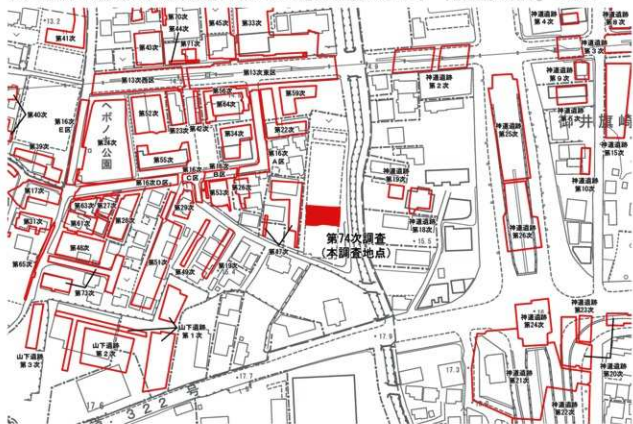
筑後国府は、7世紀末から12世紀後半にかけて古宮地区から阿弥陀地区、朝妻地区、そして横道遺跡を三遷しており、300次を超える発掘調査から、古代の筑後国における政治経済の中心的な役割を担ったことが明らかになっている。また、山下遺跡では7～9世紀の溝や土坑から、緑釉陶器の香炉蓋や復数の越州窯系青磁碗が出土しており、『高良記』に登場する在国司居屋敷との関連が指摘されている。ヘボノ木遺跡では、8世紀中頃～9世紀前半に四面廂建物と八脚門、方形周溝を伴う回廊

状遺構が造営される。これらの遺構は数回の建て替えが確認されており、その性格は御井郡衙とする説と、寺院とする説がある(注2)。なお、筑後国府跡からヘボノ木遺跡にかけては、東西に走る道路が検出されている。この道路はヘボノ木遺跡で北方と東方の二手に分かれ、前者は太宰府へ向かう推定駅路、後者は山本・竹野・生葉郡へ向かう伝馬道とされている。同時期の集落遺跡は、ヘボノ木遺跡の北東部に7世紀後半～8世紀中頃の竪穴建物群が分布し、久保野遺跡や山下遺跡、神道遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡でも8～9世紀の竪穴建物、吹上遺跡で10～11世紀の掘立柱建物が検出されるなど、広範囲に集落遺跡が分布する。また、西小路遺跡では方形区画溝を伴う10～11世紀の掘立柱建物群が検出されており、屋敷の存在が示唆される。

11世紀末に筑後国府が朝妻地区から横道遺跡に移転したことに伴い、主要道も高良山麓の街道(後の薩摩街道)へ移ったと考えられている。ヘボノ木遺跡の伝馬路は11世紀まで存続するが、12世紀には井戸や土坑、土壌墓が点在するのみとなる。隣接する西小路遺跡でも同様に土壌墓が点在するだけだが、山下遺跡では12世紀の溝や土坑が検出されており、筑後国府跡の区画溝や下見遺跡の13世紀の館跡と共に、丘陵上に集落が点在したことを示唆する。薩摩街道沿いでは、二本木遺跡で10～11世紀に遺構が増加し、麓遺跡では12世紀後半の方形館の周溝が検出されており、薩摩街道の下限を示す。12～13世紀には、篠田遺跡や二本木遺跡、岩井川遺跡、安養寺境内遺跡、麓遺跡、日出原遺跡、日出原南遺跡、高良山大祝邸跡、高良山大官司邸跡で溝や井戸、地下式墳などの土坑が多数検出された。街道沿いや高良大社の門前に、今日の御井町の前身にあたる集落があったことが窺える。

【注】

- (1) 白木守「【資料紹介】久留米市ヘボノ木遺跡出土の楽浪系土器」福岡考古談話会『福岡考古』第18号 平成11年
 (2) 小澤太郎「寺院が官衙か—福岡県久留米市所在ヘボノ木遺跡の機能をめぐって—」『古代東国の考古学』平成17年



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

III. 調査の記録

1. 基本層序

調査地点の現況は畑地だが、以前はビニールハウスが並んでいた。そのため地表約0.1～0.2mを①耕作土が覆う。その下に、②褐色土を含む灰褐色土が約0.1m見られ、調査区北半の壁面には、③嵩上げに伴うとみられる厚さ0.3～0.4mの黄色および灰白色の砂質土が堆積する。これらの下層に④厚さ0.3mの礫や灰色土を含む灰褐色土や⑤包含層である礫や土器片を含む0.2mの黒褐色土、⑥礫を含む0.1mのオリーブ黒色土を経て、地表から0.9～1.3m、標高13.4～13.9mの地山面に至る。遺構は、この地山面で確認した。地山は、調査区の西部が礫を多く含む浅黄色と灰色の砂質土、西部が礫を含むにぶい橙色の砂質土である。

2. 検出遺構

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居1基、ピット1基、埋壘2基、古代の土坑3基、ピット2基、火葬墓1基、中世の土坑3基、その他多数のピットを検出した。以下、主な遺構について年代ごとに述べる。



第3図 ヘボノ木遺跡第74次調査遺構配置図 (1/150)



第4図 調査区全景（南上空から）



第5図 S1270 完掘状況（北西から）



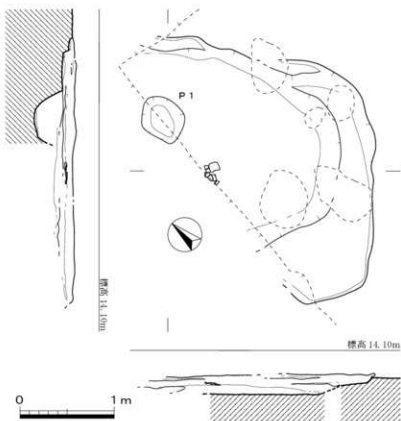
第6図 S1270 土器出土状況（西から）

縄文時代の遺構

竪穴住居

S 1270（第5～7図）

調査区北東部で検出した竪穴住居である。焼土や炭化物の集中など、炉の痕跡は見つからなかったが、底面に直径0.42～0.53m、深さ0.32mの柱穴とみられるピットを有することや、平面形から竪穴住居と判断した。表土剥ぎの際に遺構の西半を削平してしまったが、小判形の平面を有していたと推定できる。検出したのは長軸3.05m、短軸2.53mのみで、底面までの深さは最大で0.25mを測る。隣接する調査区の壁面で遺構の断面を確認できなかったので、長軸の規模は5mに取まると考えられる。埋土は、炭粒や礫、土器片を大量に含む黄褐色土だった。遺物は、浅鉢や深鉢、注口土器の



第7図 S1270実測図 (1/40)

注口部など約400点の細片を含むビニール袋2袋分の縄文土器と、サヌカイト製の打製石鏃、黒曜石や安山岩、サヌカイトの剥片が出土した。

ピット

SP160 (第8・11図)

調査区中央部西寄りで見出したピットである。歪な隅丸方形の平面を呈し、長さ0.68m、幅0.41m、深さ0.11mを測る。出土遺物は、縄文土器の甕の底部1点と片岩などの礫2点である。

埋篋

SX2 (第9・11図)

調査区北東部で見出した。掘方は円形の平面を呈し、直径0.33～

0.38m、深さは最大で0.20mを測る。埋土は、にぶい褐色土が占める。埋篋は底部と胴部で接合せず、出土状況から既に割れた状態で埋置した可能性がある。埋篋以外の遺物は出土しなかった。

SX3 (第10・11図)

調査区北東部で見出した。削平が特に著しく、見出したのは底面の5cmのみで、埋篋も底部のみが残存していた。掘方は円形の平面を呈し、直径0.25～0.26mを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色土が占めた。埋篋以外の出土遺物は無い。



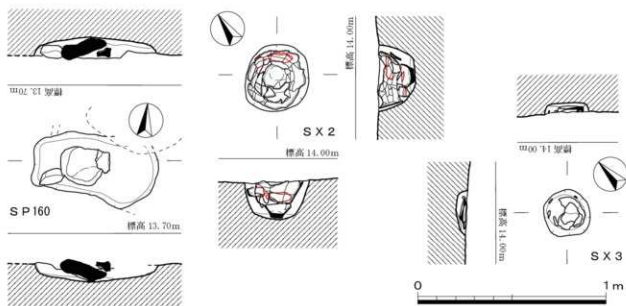
第8図 SP160 土器出土状況 (南から)



第9図 SX2 検出状況 (南西から)



第10図 SX3 検出状況 (北から)



第11図 SP160、SX2・3実測図 (1/20)

古代の遺構

土坑

SK161 (第12・13図)

調査区南西部で検出した、歪な楕円形の平面を有する土坑である。長さ1.33m、幅1.03m、深さは0.17mを測る。土坑の北部はビットが後出する。埋土は、炭粒を含む黄褐色砂質土が占める。出土遺物は、縄文土器や土師器の甕の細片、焼成粘土塊、黒曜石の剥片のほか、長さ28cm、幅13~15cm、重さ7.5kgの石英塊が出土した。

SK250 (第13・14図)

調査区中央部南寄りで検出した、歪な円形の平面を有する土坑である。遺構の西辺をビットが削平する。長さ1.28m、幅1.12m、深さは最大で0.17mを測る。埋土は、橙色土ブロックを含む砂質の暗灰黄色土と黄灰色土だった。出土遺物は、土師器の坏や埴、甕、把手、黒色土器A類の埴、須恵器甕の胴部片、焼成粘土塊、黒曜石の剥片がある。

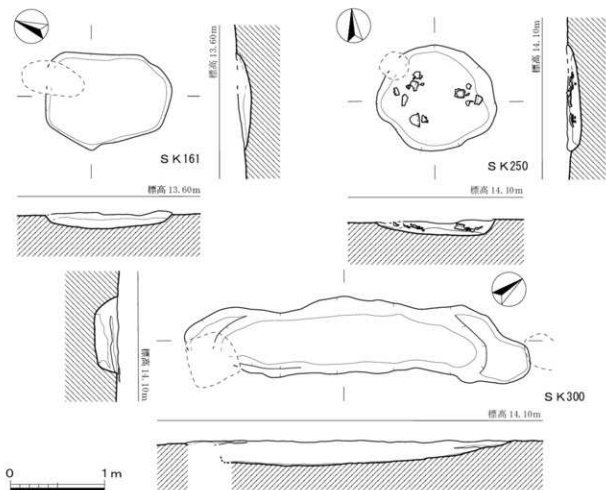
SK300 (第13・15図)

調査区南東部で検出した、細長い不定形の平面を有する土坑である。両端はビットが後出する。長さ3.64m、幅0.82mで、深さは最大で0.26mを測る。底面は緩やかな船底状で、両端に段を有する。埋土は、土器片や礫を含む黒褐色土が占める。遺物は、縄文土器や弥生土器の甕、短頸壺、高坏、土師器の坏や甕の細片、用途不明の土製品、黒曜石製の打製石鏃と赤色チャート製のスクレイパー、黒曜石やサヌカイト、石英の剥片が出土した。縄文土器と弥生土器、古代の土師器が混在するが、土師器の細片が最も多く出土していることから、古代の遺構と判断した。



第12図 SK161石英出土状況 (南東から)

III. 調査の記録



第13図 SK161・250・300実測図 (1/40)



第14図 SK250 遺物出土状況 (北東から)



第15図 SK300 完掘状況 (南から)

ピット

SP275 (第16・17図)

調査区東部に検出した、楕円形の平面を有するピットである。ピットの直径は0.18～0.29m、深さは最大で0.17mを測る。ピットの深さ0.12m付近に土師器の埴2点が割れた状態で埋没していた。埋土は、土器片や炭粒を含む褐灰色土だった。土師器埴以外の出土遺物は、土師器の坏や黒色土器A類の埴の破片のみである。

SP305 (第16・18図)

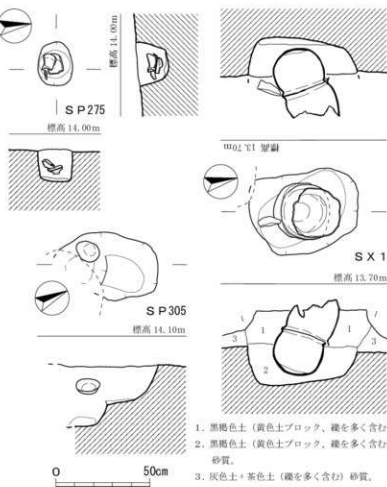
調査区東部壁際に検出したピットである。南部は別のピットが後出するが、歪な隅丸方形の平面を有するとみられる。残存長0.53m、幅0.38m、深さは最大で0.34mを測る。ピットの深さ0.2m付近に段があるほか、深さ0.15m付近に土師器坏が直立した状態で埋没していた。坏以外には、土師器の坏蓋や坏、甕の細片、黒曜石の剥片が出土した。

火葬墓

SX1 (第16・19・20図)

調査区南西部で検出した遺構である。土師器甕を合口式に埋納しており、過去にヘボノ木遺跡で検出された遺構に準拠して火葬墓とした。ただし、内部の埋土に火葬骨や炭化物、焼土が確認できなかったため、埋納遺構など他の用途も考えられる。甕の埋置角は 72° を測る。表土

剥ぎ中に検出したため、上甕の上部は割れた状態で検出したが、内部は空洞で、下甕に粘質土が数cm堆積していた。甕の内部から土師器の皿が出土したが、破片であり、表土剥ぎ中の混入である可能性が高い。掘方は検出面で長さ0.58m、幅0.46m、深さ0.21mを測るが、上甕の位置から実際の深さは0.6m以上あったと考えられる。掘方の埋土は、黄色土ブロックや礫を多く含む黒褐色土だった。明瞭な石組などは無いが、片岩の破片が下甕に乗った状態で出土したほか、弥生土器の甕や土師器の坏、皿、甕の破片が掘方から出土した。



第16図 SP275・305、SX1実測図 (1/20)



第17図 SP275 土器出土状況 (西から)



第18図 SP305 土器出土状況 (北西から)



第19図 SX1上層出土状況(南東から)



第20図 SX1下層出土状況(南東から)

中世の遺構

土坑

SK230 (第21・23図)

調査区南東部壁際で検出した土坑である。遺構の南半は調査区外に及ぶが、歪な隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは東西1.87m、南北1.22mで、深さは最大で0.45mを測る。地山直上の包含層に後出し、土坑周囲の遺構にも後出する。埋土は礫を多く含み、灰黄褐色砂質土が占めるが、底面付近は灰黄褐色土も含む。遺物は、土師器の坏や甕の細片、貿易陶磁器が出土した。

SK240 (第21・23図)

調査区南東部壁際で検出した土坑である。遺構の南半は調査区外に及ぶが、歪な隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは東西2.07m、南北1.24mで、深さは最大で0.46mを測る。地山直上の包含層に後出し、土坑周囲の遺構にも後出する。埋土は礫を多く含む暗灰黄色から黄灰色の砂質土である。出土遺物は、土師器の坏や皿、甕の細片のみである。坏や皿の底部は糸切り底だった。

SK320 (第22・23図)

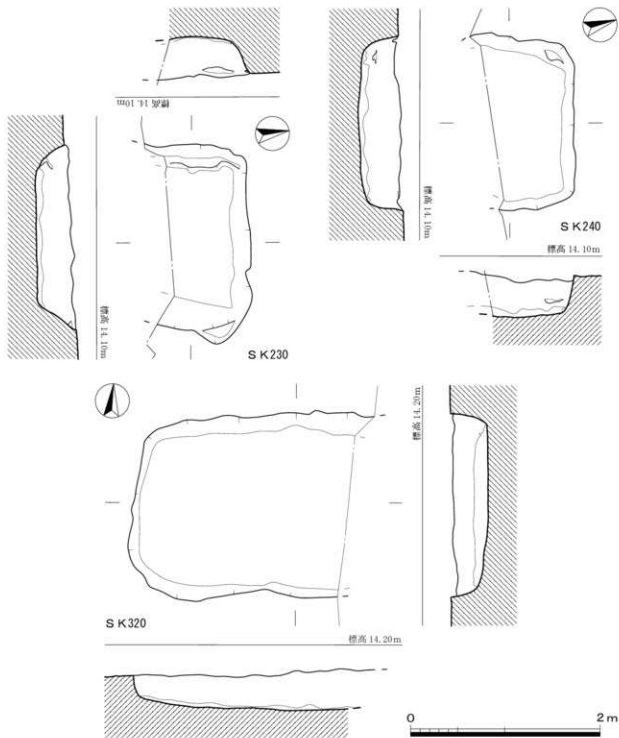
調査区南東部壁際で検出した土坑である。遺構の東部は調査区外に及び、歪な隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは東西2.62m、南北1.98mで、深さは最大で0.43mを測る。地山直上の包含層に後出し、土坑周囲の遺構にも後出する。埋土は礫を多く含み、灰黄褐色砂質土が占めるが、底面付近は灰黄褐色土も含む。遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、黒色土器B類の埴、白磁碗の細片、黒曜石の剥片が出土した。坏や皿の底部は糸切り底で占められる。



第21図 SK230・240 完掘状況(北東上空から)



第22図 SK320 完掘状況(東から)



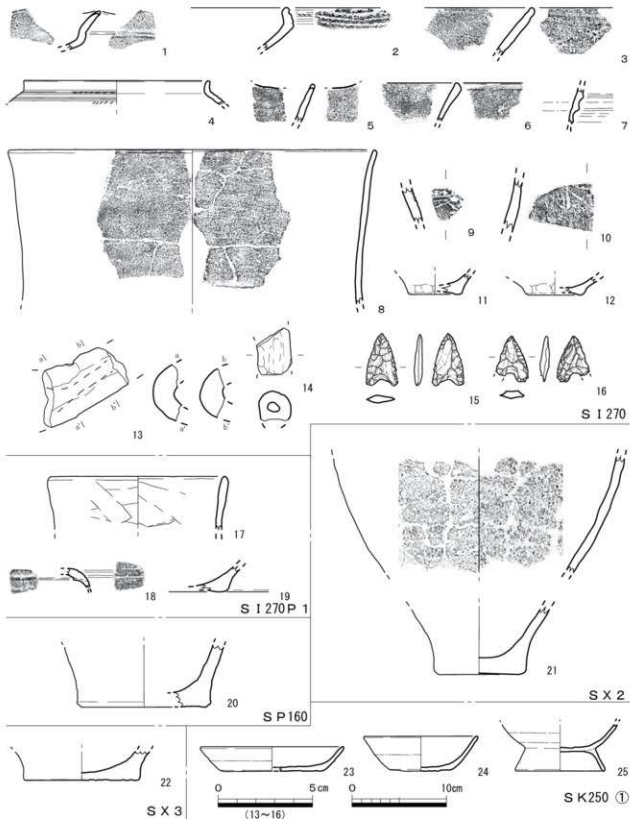
第23図 SK230・240・320実測図 (1/40)

3. 出土遺物 (第24～31図、第1・2表)

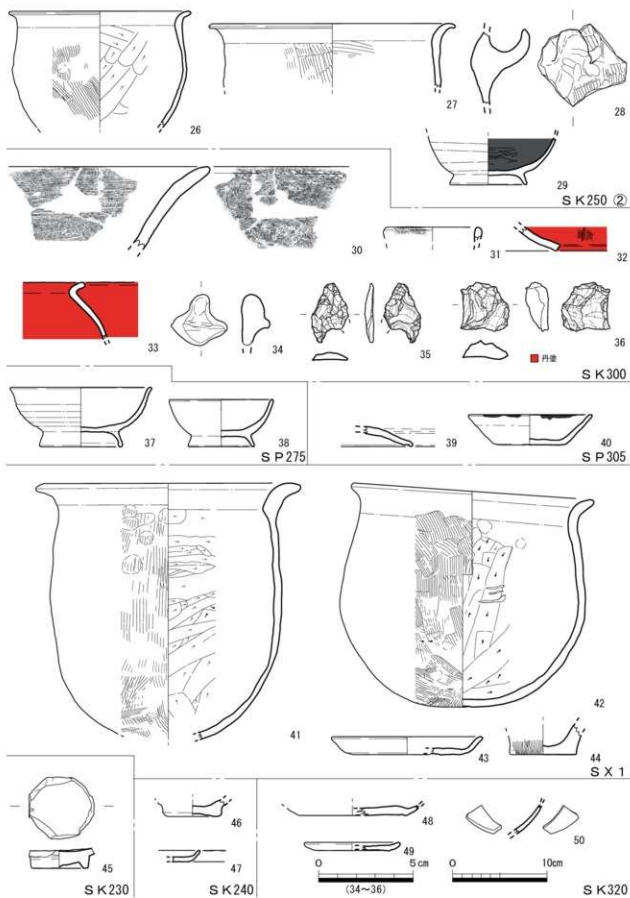
合計でバンコンテナ5箱分の遺物が出土した。大半を縄文土器と古代の土師器、黒曜石の剥片が占め、併せて弥生土器や古代の黒色土器A類・B類、須恵器、中世の土師器、貿易陶磁器、打製石鏃などの石製品、鉄滓とみられる鉄製品が出土した。なお、表土からも黒色土器B類の塊の細片、正格子目叩きや縄目叩きの古瓦、玉縁を有する白磁碗や同安窯系の青磁碗などの貿易陶磁器、滑石製石鍋、近世の陶器の破片が出土している。以下、個々の遺物の詳細は遺物観察表を参照願いたい。

III. 調査の記録

- 【遺物観察表について】・第24～31図と第1・2表の遺物番号は同一である。
 ・〔 〕は復元値を、()は残存値を、-は欠損または該当する部位が無いことを意味する。
 ・胎土は、0.5mm未満の砂粒を「微砂粒」、1mm未満を「細砂粒」、1mm以上を「砂粒」とした。
 ・貿易陶磁器の分類は、大宰府分類（大宰府市教育委員会『大宰府桑坊跡XV 陶磁器分類編』大宰府市の文化財第49集 平成12年）に拠った。
 ・遺物番号は、久留米市市民文化庁文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

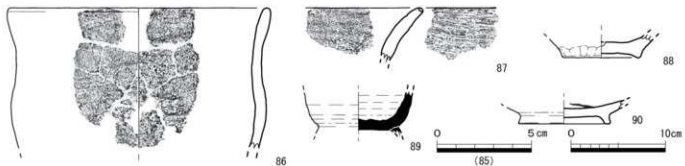
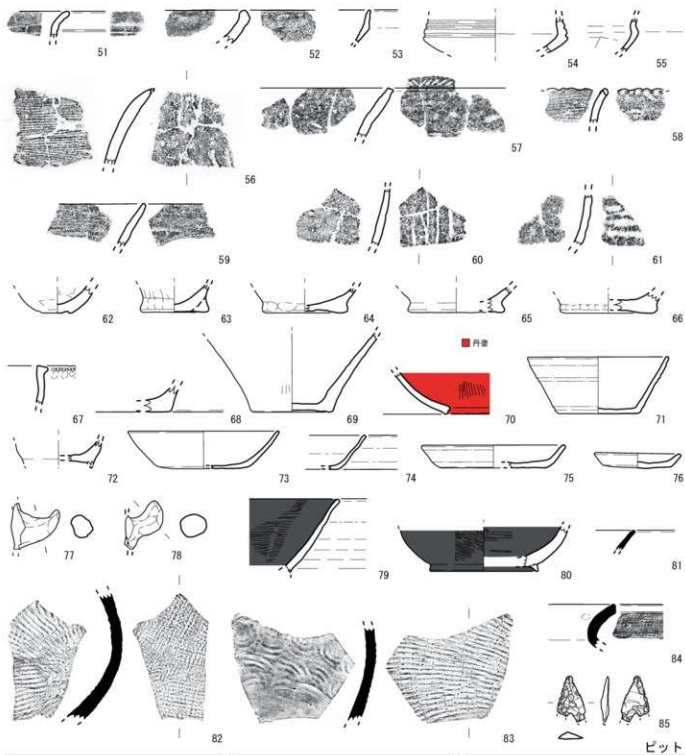


第24図 出土遺物実測図1 (1/4, 1/2)



第25図 出土遺物実測図2 (1/4, 1/2)

III. 調査の記録



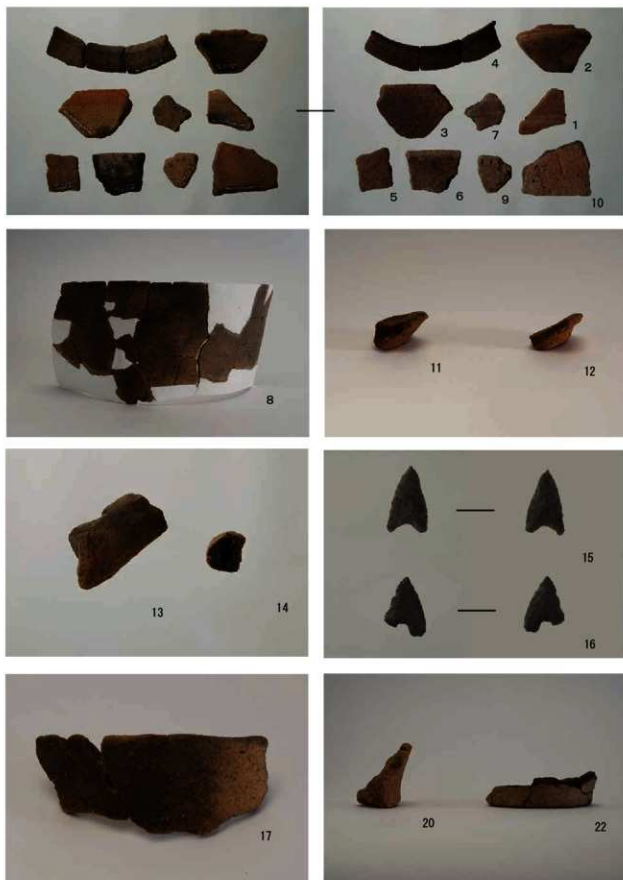
第26図 出土遺物実測図3 (1/4, 1/2)

第1表 出土遺物観察表1

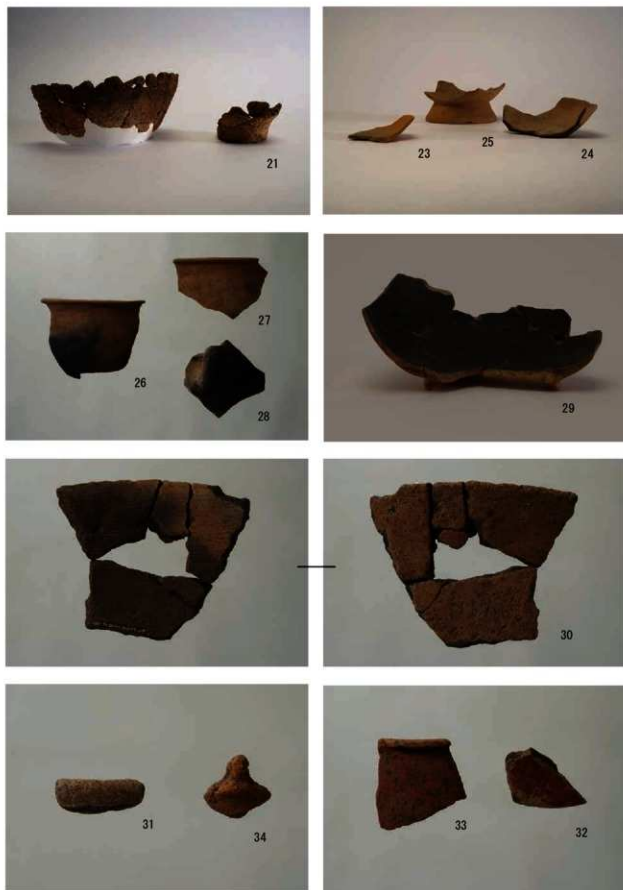
遺物 番号	出土 場所	種別	形状	寸法 (mm)			色 澤			調査・加工			出土 状況	備考・備考	写真 番号	
				口径 (最大)	直径 (最大)	高さ (最大)	外面	内面	外面	内面	底面・底弁 (最大)					
1	第130号	S 1270	縄文土器	鉢鉢	—	—	(4.0)	褐色色	淡褐色色	淡褐色1条 磨材	磨材	—	—	磨材跡、磨材を 含む	201207 000005	
2	第130号	S 1270	縄文土器	鉢鉢	—	—	(4.5)	褐色色～ にぶい褐色色	褐色色	磨材ナブ 注層3条、磨材	磨材ナブ	—	—	磨材を多く含む	201207 000011	
3	第130号	S 1270	縄文土器	鉢鉢	—	—	(3.0)	褐色色	褐色色	磨材ナブ	磨材ナブ	—	—	磨材を含む	201207 000016	
4	第130号	S 1270	縄文土器	鉢鉢	□18.4	—	(2.5)	灰白色 ～褐色色	灰褐色色	磨材ナブ 注層4条・磨材	磨材ナブ	—	—	磨材跡、磨材を 含む	201207 000022	
5	第130号	S 1270	縄文土器	鉢	—	—	(3.0)	にぶい 褐色色	淡褐色色	磨材	磨材ナブ	—	—	磨材を含む	201207 000023	
6	第130号	S 1270	縄文土器	鉢	—	—	(4.0)	にぶい褐色色	にぶい褐色色	磨材ナブ	磨材ナブ	—	—	磨材を多く含む	201207 000029	
7	第130号	S 1270	縄文土器	鉢	—	—	(4.0)	灰白色～ 灰褐色色	褐色色 ～褐色色	磨材ナブ	磨材ナブ	—	—	磨材を多く含む	201207 000038	
8	第130号	S 1270	縄文土器	鉢鉢	□26.4	—	(16.2)	灰褐色色～ にぶい褐色色	黒褐色色～ 灰褐色色	ミヅキ ミヅキ	ミヅキ	—	—	内外面に黒炭	201207 000048	
9	第130号	S 1270	縄文土器	鉢鉢	—	—	(3.0)	にぶい 褐色色	淡褐色色	淡褐色4条 磨材・磨材ナブ	ナブ	—	—	磨材跡、磨材を 含む	201207 000052	
10	第130号	S 1270	縄文土器	鉢鉢	—	—	(3.0)	褐色～ 淡褐色色	褐色色	磨材	磨材ナブ	—	—	磨材を多く含む	201207 000053	
11	第130号	S 1270	縄文土器	鉢	—	□3.2	(2.7)	にぶい褐色色 ～褐色色	灰褐色色	磨材ナブ 磨材ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	磨材、褐色粒子を 含む	201207 000059	
12	第130号	S 1270	縄文土器	鉢	—	□3.0	(1.9)	褐色～ 淡褐色色	にぶい褐色色	磨材ナブ 磨材ナブ	磨材ナブ	ナブ	ナブ	磨材を含む	201207 000069	
13	第130号	S 1270	縄文土器	圧口 土器	—	—	(4.2)	淡褐色色 ～灰褐色色	にぶい褐色色	ナブ	磨材	—	—	磨材、磨材を含む	201207 000080	
14	第130号	S 1270	縄文土器	不明 製品	□2.40	(1.80)	1.40	褐色色	にぶい褐色色	ナブ	ナブ	水漬みの穿孔	—	磨材、穿孔、穿孔 粒を含む	201207 000082	
15	第130号	S 1270	青銅品	打割 石鏝	2.4	1.7	8.4	—	灰色	—	磨材跡	—	—	空山治	201207 000161	
16	第130号	S 1270	青銅品	打割 石鏝	2.4	1.7	8.5	—	灰色	—	磨材跡	—	—	空山治	201207 000162	
17	第130号	S 1270 P 1	縄文土器	鉢鉢	□16.4	—	(3.0)	褐色色～ 淡褐色色	淡褐色色 ～褐色色	工具ナブ	工具ナブ	—	—	磨材を多く含む	201207 000143	
18	第130号	S 1270 P 1	縄文土器	鉢鉢	—	—	(2.1)	にぶい褐色色～ にぶい褐色色	褐色色～ にぶい褐色色	磨材ナブ 注層2条	磨材ナブ	—	—	磨材跡、磨材を 含む	201207 000144	
19	第130号	S 1270 P 1	縄文土器	鉢	—	—	(2.7)	褐色～ 褐色色	にぶい褐色色	磨材	磨材ナブ	水漬層	—	磨材を含む	201207 000145	
20	第130号	S P 301	縄文土器	甕	—	(13.2)	(6.4)	褐色色	にぶい褐色色	磨材ナブ	ナブ	ナブ	ナブ	磨材を多く含む	201207 000139	
21	第130号	S X 2	縄文土器	鉢鉢	—	8.8	□8.1 □8.0	淡褐色色 ～褐色色	灰色～褐色色	磨材ナブ 磨材ナブ	磨材ナブ	ナブ	ナブ	磨材を多く含む	201207 000155	
22	第130号	S X 3	縄文土器	鉢鉢	—	12.0	(3.0)	にぶい 褐色色	褐色色	ナブ 磨材ナブ	ナブ	水漬層	—	磨材を多く含む	201207 000068	
23	第130号	S K 200	土師器	甕	□14.8	□14.4	2.4	褐色色 ～褐色色	灰褐色色 ～褐色色	磨材 磨材	磨材ナブ 磨材	ヘラツギ 磨材	—	磨材、赤色粒子を 含む	201207 000071	
24	第130号	S K 200	土師器	甕	□11.8	□6.0	3.7	にぶい褐色色 ～褐色色	にぶい褐色色 ～褐色色	磨材ナブ	磨材ナブ	ヘラツギ 水漬層	—	磨材、赤色粒子を 含む	201207 000072	
25	第130号	S K 200	土師器	甕	—	18.2	(3.0)	にぶい 褐色色	にぶい 褐色色	磨材ナブ ヘラツギ	磨材ナブ ナブ	ヘラツギ 磨材ナブ	—	磨材、赤色粒子を 多く含む	201207 000076	
26	第130号	S K 200	土師器	甕	□16.4	—	(11.0)	褐色～ 褐色色	にぶい褐色色 ～にぶい褐色色	赤毛目 磨材ナブ	ケズリ 磨材ナブ	—	—	磨材、褐色粒子、 赤色粒子を 含む	201207 000077	
27	第130号	S K 200	土師器	甕	□24.0	—	(6.0)	褐色～ にぶい褐色色	にぶい褐色色 ～にぶい褐色色	赤毛目 磨材ナブ	赤毛目 磨材ナブ	—	—	磨材、褐色粒子を 含む	201207 000078	
28	第130号	S K 200	土師器	甕	□21.6	(2.3)	(6.0)	褐色色	にぶい褐色色 ～褐色色	ヘラツギ ナブ	磨材ナブ	磨材ナブ	—	磨材、赤色粒子、 石粒を含む	201207 000079	
29	第130号	S K 200	土師器	大甕	—	7.8	(4.9)	褐色～ にぶい褐色色	褐色色	磨材ナブ ヘラツギ	磨材ナブ ヘラツギ	ヘラツギ 磨材ナブ	—	磨材、褐色、赤色 粒を含む	201207 000073	
30	第130号	S K 300	縄文土器	鉢鉢	—	—	(8.0)	にぶい褐色色	灰褐色色～ にぶい褐色色	磨材ナブ 磨材ナブ	磨材ナブ	磨材ナブ	—	磨材を多く含む	201207 000119	
31	第130号	S K 300	縄文土器	鉢	—	—	(2.5)	淡褐色色	淡褐色色～ にぶい褐色色	磨材ナブ	磨材ナブ	—	—	磨材を含む	201207 000121	
32	第130号	S K 300	青銅生土器	甕	—	—	(2.5)	明褐色色～ にぶい褐色色	にぶい褐色色	ミヅキ 丹塗層	磨材ナブ	磨材ナブ 丹塗層	—	磨材を多く含む	201207 000122	
33	第130号	S K 300	青銅生土器	甕	—	—	(6.0)	明褐色色	にぶい褐色色	ナブ跡 磨材ナブ	ナブ跡 磨材ナブ	—	—	磨材、赤毛、黒目 を含む	201207 000124	
34	第130号	S K 300	土製品	不明 製品	(3.7)	0.90	1.5	褐色～ にぶい褐色色	にぶい褐色色	ナブ	磨材ナブ	—	—	磨材を多く含む	201207 000128	
35	第130号	S K 300	青銅品	打割 石鏝	3.1	0.9	8.5	—	灰色	—	磨材跡	—	—	磨材	201207 000129	
36	第130号	S K 300	青銅品	メタレブ バー	2.6	2.6	1.2	—	赤褐色	—	磨材跡	—	—	赤チャート	201207 000132	
37	第130号	S P 275	土師器	甕	□14.7	□6.0	6.2	褐色～ にぶい褐色色	褐色色	磨材ナブ ヘラツギ	磨材ナブ ナブ	ヘラツギ 磨材ナブ	—	磨材、赤色粒子を 多く含む	201207 000111	
38	第130号	S P 275	土師器	甕	□10.4	□7.0	5.0	褐色色	にぶい褐色色	磨材	磨材ナブ	磨材ナブ	—	磨材、赤色粒子を 含む	201207 000112	
39	第130号	S P 305	土師器	甕	—	—	(2.1)	淡褐色色	褐色色～ 淡褐色色	ヘラツギ 磨材ナブ	磨材ナブ	—	—	磨材、黒目、褐色 粒を含む	201207 000133	
40	第130号	S P 305	土師器	甕	□12.6 ～□12.6	7.4 ～7.5	3.1 ～3.2	明褐色色～ 褐色色	褐色色～ 褐色色	磨材ナブ	磨材ナブ	ヘラツギ	—	磨材、黒目、褐色 粒を含む	201207 000135	
41	第130号	S X 1	土師器	甕	□7.2 ～□8.0	—	(11.0)	褐色～ 褐色色	褐色色	赤毛目 磨材ナブ	ケズリ 磨材ナブ	—	—	磨材を含む	201207 000091	
42	第130号	S X 1	土師器	甕	□4.8 ～□6.0	1.0 ～1.9	21.9 ～23.7	褐色～ 褐色色	褐色色	赤毛目 磨材ナブ	ケズリ・ナブ 磨材ナブ	ナブ	ナブ	—	磨材を含む	201207 000092
43	第130号	S X 1 磨材	土師器	甕	□19.4	(12.0)	1.9	褐色～ にぶい褐色色	褐色色	磨材ナブ	磨材ナブ	ヘラツギ 磨材ナブ	—	磨材、褐色粒子を 含む	201207 000093	
44	第130号	S X 1 磨材	青銅生土器	甕	—	6.7	(3.2)	にぶい 褐色色	褐色色	赤毛目	ナブ	水漬層	—	磨材を多く含む	201207 000094	
45	第130号	S K 200	青銅品	磨材	6.0	4.0	(1.0)	灰白色 (磨材)	灰白色 (磨材)	—	磨材	ヘラツギ 磨材	—	磨材、褐色粒子を 含む	201207 000095	

第2表 出土遺物観察表2

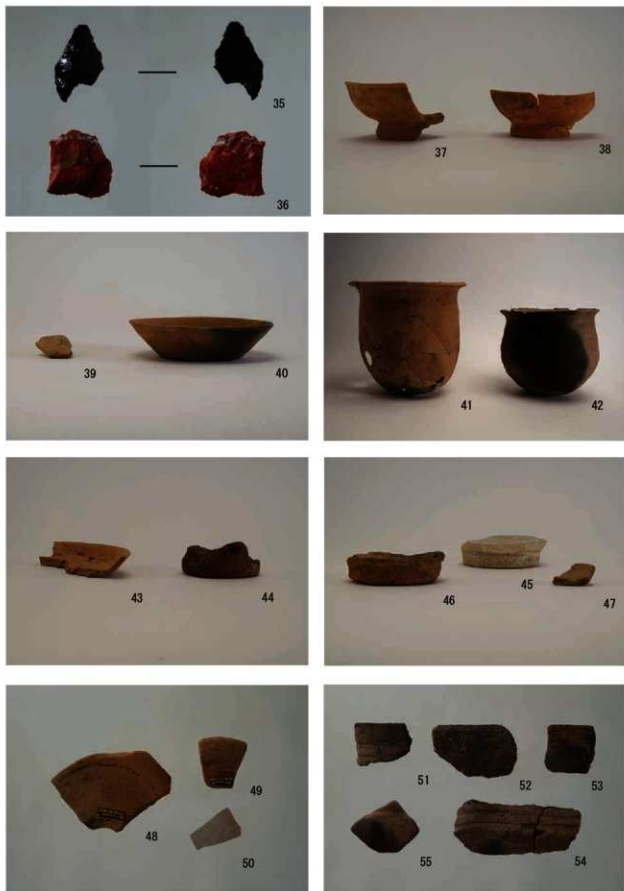
標号	出土遺物	種別	形状	位置 (m)			色調						出土状況	観察者	発掘年度		
				(口縁上縁)	口縁	胎体(底)	外面	内面	外面	内面	胎体(底)	胎体(底)					
46	200306	S K268	縄文土器	鉢	—	6.2	(1.8)	にがい黄褐色～褐色	褐色～にがい黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	胎体赤く含む	横溝 隆雄	201207	600061	
47	200306	S K268	土師器	小皿	—	1.2	(1.2)	にがい黄褐色	にがい黄褐色	黒ナブ	黒ナブ	—	焼痕、雲母を含む	横溝 隆雄	201207	600062	
48	200306	S K269	土師器	片	—	11.2	(1.0)	黄褐色～黄褐色	褐色～灰褐色	黒ナブ	黒ナブ	赤切り焼	焼痕、雲母、褐色胎体を含む	201207	600136		
49	200306	S K270	土師器	甕	(9.7)	(7.2)	1.85	褐色	褐色	黒ナブ	黒ナブ	赤切り焼	焼痕、雲母、褐色胎体を含む	201207	600138		
50	200306	S K270	土師器	甕	—	—	(3.6)	灰白色(胎体)	灰白色(胎体)	黒胎	黒胎	—	焼痕、褐色胎体を含む	201207	600143		
51	200306	S P36	縄文土器	西鉢	—	—	(2.9)	黄褐色	黄褐色	洗滌1身	黒ナブ	—	胎体赤く含む	201207	600141		
52	200306	S P36	縄文土器	西鉢	—	—	(3.4)	黄褐色～にがい黄褐色	黒褐色	黒ナブ	黒ナブ	—	砂粒、胎体赤く含む	1)横溝 隆雄	201207	600059	
53	200306	S P238	縄文土器	西鉢	—	—	(3.4)	黄褐色～にがい黄褐色	にがい黄褐色	黒ナブ	黒ナブ	—	胎体赤く含む	1)横溝 隆雄	201207	600063	
54	200306	S P33	縄文土器	西鉢	—	—	(3.8)	灰褐色～黄褐色	黒ナブ	洗滌2身	工具ナブ	—	胎体赤く含む	横溝 隆雄	201207	600142	
55	200306	S P33	縄文土器	西鉢	—	—	(3.5)	黄褐色～黄褐色	灰褐色	黒ナブ	ナブ	—	焼痕、胎体赤く含む	201207	600112		
56	200306	S P261	縄文土器	西鉢	—	—	(6.4)	黄褐色	黄褐色～灰褐色	ナブ	ナブ	—	砂粒、雲母を含む	201207	600114		
57	200306	S P36	縄文土器	西鉢	—	—	(5.3)	黄褐色～褐色	黄褐色～褐色	黒目	黒目	—	砂粒、雲母を含む	201207	600053		
58	200306	S P168	縄文土器	西鉢	—	—	(3.8)	にがい黄褐色	黄褐色	黒ナブ	黒ナブ	—	砂粒、胎体赤く含む	201207	600033		
59	200306	S P211	縄文土器	西鉢	—	—	(2.5)	にがい黄褐色	黄褐色～にがい黄褐色	黒ナブ	黒ナブ	—	胎、砂粒を含む	201207	600058		
60	200306	S P81	縄文土器	鉢	—	—	(6.4)	暗赤褐色	暗褐色	黒胎	黒ナブ	—	滑石を含む	横溝 隆雄	201207	600051	
61	200306	S P93	縄文土器	鉢	—	—	(3.4)	暗赤褐色	暗赤褐色	黒胎	ナブ	—	滑石を含む	横溝 隆雄	201207	600052	
62	200306	S P214	縄文土器	西鉢	—	—	3.1	(2.8)	にがい黄褐色～褐色	にがい黄褐色	黒ナブ	黒ナブ	接合部	ほろぼろ、砂粒、黒胎を含む	201207	600132	
63	200306	S P269	縄文土器	西鉢	—	—	(6.2)	黄褐色～褐色	褐色	黒ナブ	ナブ	—	砂粒、胎体赤く含む	201207	600046		
64	200306	S P171	縄文土器	鉢	—	—	(7.4)	0.10	褐色	にがい黄褐色	黒ナブ	ナブ	太鼓	砂粒、胎体赤く含む	201207	600054	
65	200306	S P171	縄文土器	鉢	—	—	(6.4)	(2.4)	黄褐色～黄褐色	黄褐色～黄褐色	黒ナブ	黒胎	黒胎、滑石、褐色胎体を含む	内溝に埋る	201207	600043	
66	200306	S P211	縄文土器	鉢	—	—	(9.4)	0.40	褐色	にがい黄褐色	黒ナブ	ナブ	砂粒、胎体赤く含む	1)横溝 隆雄	201207	600055	
67	200306	S P122	弥生土器	甕	—	—	(4.1)	(1.1)	にがい黄褐色～黄褐色	にがい黄褐色～黄褐色	黒ナブ	ナブ	—	胎体赤く含む	201207	600032	
68	200306	S P260	弥生土器	甕	—	—	(2.7)	褐色	褐色	黒胎	黒ナブ	黒胎	胎体赤く含む	201207	600057		
69	200306	S P263	弥生土器	甕	—	—	8.5	0.30	褐色	褐色	黒目	ナブ	ナブ	胎体赤く含む	横溝 隆雄	201207	600056
70	200306	S P261	弥生土器	高片	—	—	(4.4)	暗赤褐色～にがい黄褐色	にがい黄褐色～黄褐色	ミヅケ片	ナブ	黒ナブ	胎体赤く含む	横溝 隆雄	201207	600067	
71	200306	S P23	土師器	埴	(14.4)	8.4	8.0	褐色	褐色	黒ナブ	黒ナブ	へラ切り	焼痕	201207	600069		
72	200306	S P266	土師器	埴	—	—	(2.4)	灰色	灰白色～にがい黄褐色	へラナブ	黒胎	黒胎	焼痕、胎体赤く含む	内溝に埋る	201207	600054	
73	200306	S P262	土師器	埴	(15.4)	(9.4)	4.8	褐色～褐色	褐色	黒胎	黒胎	へラ切り	砂粒、赤胎赤く含む	201207	600081		
74	200306	S P142	土師器	片	—	—	(3.8)	褐色	褐色	黒ナブ	黒胎	—	胎体赤く含む	1)横溝 隆雄	201207	600041	
75	200306	S P62	土師器	皿	(3.4)	(11.4)	2.4	褐色	褐色	黒ナブ	黒ナブ	へラ切り	焼痕、雲母を含む	201207	600117		
76	200306	S P79	土師器	小皿	8.5	6.1	1.7	にがい黄褐色～にがい黄褐色	にがい黄褐色	黒ナブ	黒ナブ	へラ切り	焼痕、雲母、赤色胎体を含む	201207	600118		
77	200306	S P274	土師器	肥子	(5.1)	(4.9)	1.8	にがい黄褐色～黄褐色	にがい黄褐色	ナブ	ナブ	—	焼痕、胎体赤く含む	内溝に埋る	201207	600109	
78	200306	S P262	土師器	肥子	(4.6)	(5.1)	2.7	褐色～黄褐色	黄褐色	ナブ	ナブ	—	焼痕、砂粒、雲母を含む	201207	600115		
79	200306	S P19	土師器	大甕	埴	—	(7.3)	褐色～黄褐色	黄褐色	へラナブ	ミヅケ	—	焼痕、褐色胎体を含む	201207	600088		
80	200306	S P268	土師器	胎子	—	—	(11.4)	0.70	褐色	黄褐色	へラナブ	黒胎	胎体赤く含む	201207	600089		
81	200306	S P274	土師器	片	—	—	(2.8)	灰白色	灰白色	黒ナブ	黒ナブ	—	焼痕、褐色胎体を含む	201207	600119		
82	200306	S P22	土師器	甕	—	—	(6.4)	灰褐色～灰白色	灰褐色	赤子目	赤行文字	—	砂粒、褐色胎体赤く含む	横溝 隆雄	201207	600016	
83	200306	S P25	土師器	甕	—	—	(6.4)	灰褐色	灰褐色	赤行文字	赤行文字	—	胎体赤く含む	201207	600062		
84	200306	S P248	土師器	甕	—	—	(4.4)	灰白色～褐色	灰白色～褐色	赤子目	黒ナブ	—	焼痕、胎体赤く含む	1)横溝 隆雄	201207	600078	
85	200306	S P264	土師器	打割	(2.4)	(1.5)	8.4	褐色	褐色	黒胎	黒胎	—	胎体赤く含む	201207	600121		
86	200306	遺構	縄文土器	西鉢	(27.2)	—	0.8	黄褐色～黄褐色	灰褐色	黒ナブ	黒ナブ	—	胎体赤く含む	内溝に埋る	201207	600120	
87	200306	遺構	縄文土器	西鉢	—	—	(3.4)	にがい黄褐色～褐色	黄褐色	黒ナブ	黒ナブ	—	砂粒、胎体赤く含む	内溝に埋る	201207	600045	
88	200306	遺構	縄文土器	西鉢	—	—	(7.4)	(2.4)	にがい黄褐色～褐色	黄褐色	ナブ	ナブ	—	胎体赤く含む	201207	600122	
89	200306	遺構	弥生土器	甕	—	—	(4.4)	灰白色	灰白色	へラナブ	へラナブ	へラ切り	焼痕、胎体赤く含む	201207	600123		
90	200306	柱礎	土師器	鉢	—	—	8.4	0.40	灰褐色～褐色	にがい黄褐色～にがい黄褐色	へラナブ	黒ナブ	へラ切り	焼痕、胎体赤く含む	201207	600124	



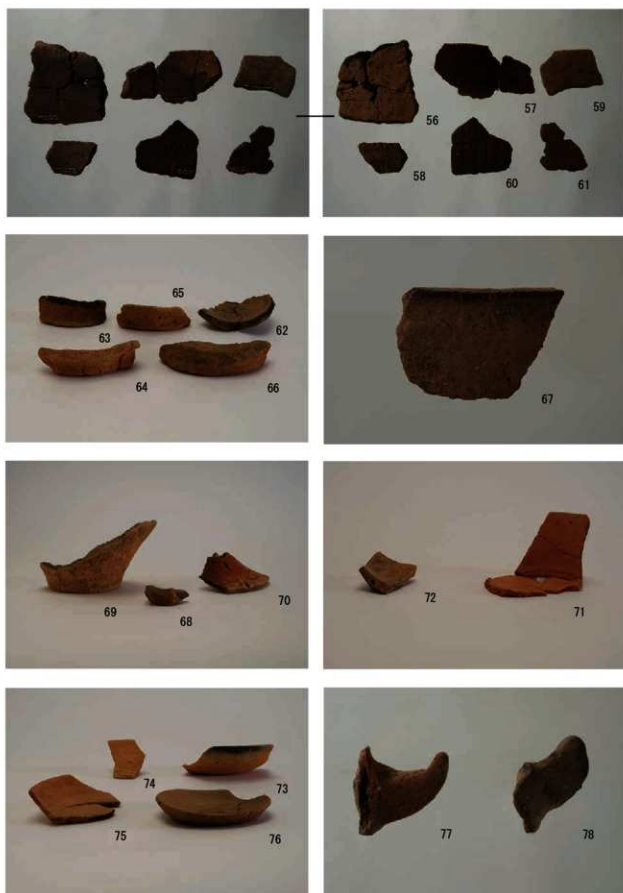
第 27 図 出土遺物写真 1



第 28 図 出土遺物写真 2



第 29 図 出土遺物写真 3



第30図 出土遺物写真4



第31図 出土遺物写真5

IV. 総 括

今回の発掘調査では、縄文時代と弥生時代、古代、中世の遺構と遺物を確認した。

縄文時代の遺構は、堅穴住居 S I 270 や埋甕 S X 2・3 が挙げられる。出土した土器は粗製土器が大半を占めるが、数少ない文様や注口土器の共伴から、S I 270 の年代は後期後半、三万田式土器から島井原式土器に収まるとみられる(注1)。周辺では、西隣のヘボノ木遺跡第47次調査で土坑 S K 2365 (注2)、神道遺跡第19次調査で後期後半の太郎迫式土器から三万田式土器にかけての堅穴遺構(注3)が検出されたほか、神道遺跡第6次調査で埋甕(注4)、第18次調査で西平式土器の土坑(注5)、第25次調査で3基の埋甕(注6)、第26次調査では5基の堅穴住居や13基もの埋甕が見つかった(注7)。S I 270 は、これら後期後半の遺構群の西側に位置し、S X 2・3 と共に、井田川の西岸にも同時期の遺構が及ぶことを明らかにした。また、滑石を含む土器片(第26図60・61)は、前期の曾畑式土器、もしくは中期後半から後期初頭の阿高式系土器に収まるとみられる。第47次調査地点でも未報告だが曾畑式土器が出土しており、南西側に位置する山下遺跡(注8)でも曾畑式土器が出土しており、前期の集落の範囲を示す。口縁部に刻目を有する土器片(第25図30、第26図57・87)は、後期後半の北久根山式土器に収まるとみられる。ヘボノ木遺跡では第62・66次調査で出土しており(注9)、西小路遺跡や水洗遺跡から広がる集落の範囲を示唆するとみられる。

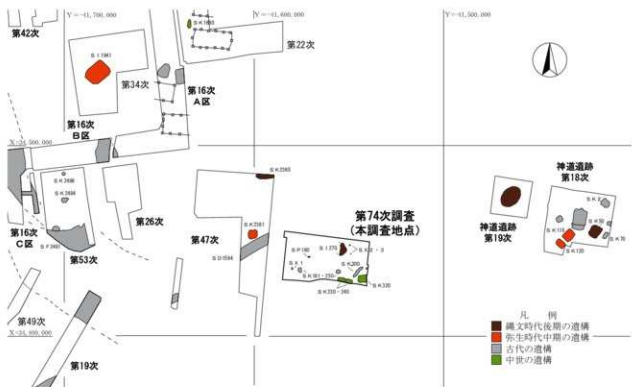
弥生時代の明瞭な遺構はないが、S K 300 や複数のピットから弥生土器が複数出土した。いずれも破片だが、その年代は前期後半と中期後半に大別できる。周辺では、前期後半から中期初頭の土坑が神道遺跡第2次調査で検出されている(注10)。中期後半の遺構は、第34次調査の堅穴住居(注11)と第47次調査の土坑、神道遺跡第18次調査の土坑 S K 118・120 が挙げられる。第74次調査はこれらの遺構の間に位置し、ヘボノ木遺跡南東部と神道遺跡の遺構が一連の集落である可能性を示す。

古代の遺構は、土坑 S K 161・250 や火葬墓 S X 1、ピットが挙げられる。S K 250 からは9世紀後半から10世紀の土器が出土した(注12)ほか、ピットから8世紀後半まで遡る筑後型の土師器碗(第26図71)や10～11世紀の黒色土器B類の鉢(第26図80)など、8世紀から11世紀の土器が出土した。S K 161・250 の規模や出土遺物は、第53次調査(注13)の S K 2484・2486 や神道遺跡第18次調査の S K 2・70 に類似しており、伝馬道に面した集落の存在が指摘できる。火葬墓 S X 1 は、ヘボノ木遺跡で8番目の検出例である。土師器甕を用いた同様の遺構は、これまで第3次調査(注14)と第7・8次調査(注15)、第24次調査(注16)、第36次調査(注17)で検出されており、ヘボノ木遺跡の中央部を中心に分布する傾向が指摘されてきた(注18)。今回、ヘボノ木遺跡の南東部で検出したことで、火葬墓が遺跡の中央部から南部一帯に広く分散する様相が示唆できる。なお、S X 1 の説明で述べたように、これらの遺構は第3次調査の検出例を除いて火葬骨や焼土といった火葬墓の特徴を示す遺物は共伴していない。従って、火葬墓以外の用途の可能性が残る。

最後に、調査区南東部で検出した土坑 S K 230・240・320 からは、貿易陶磁器の白磁碗や糸切底の土師器皿が出土した。これらわずかな出土遺物から、遺構の年代は12世紀に収まるとみられる。同時期の遺構として、第22次調査(注19)の S K 1680 が挙げられるが、ヘボノ木遺跡の12世紀の遺構がこのように単独で分布するのに対して、S K 230・240・320 は密集している点が注目できる。

【注】

- (1) S1270出土の縄文土器の年代は、下記の文献を参考にした。
宮内克己「三万田式土器の研究」九州古文化研究会『古文化談叢』第8集 昭和56年
富田紘一「三万田式土器」加藤晋平・小林達雄・藤本強、編『縄文土器Ⅱ』縄文時代の研究4 雄山閣出版 平成6年
後藤晃一「九州縄文時代注口土器の研究」九州古文化研究会『古文化談叢』第48集 平成14年
久山町教育委員会『片見鳥遺跡』久山町文化財調査報告書第11集 平成18年
- (2) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第11集』久留米市文化財調査報告書第71集 平成2年
- (3) 久留米市教育委員会『平成11年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第161集 平成12年
- (4) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第6集』久留米市文化財調査報告書第50集 昭和62年
- (5) 久留米市教育委員会『神道遺跡 一第18次調査一』久留米市文化財調査報告書第154集 平成11年
- (6) 久留米市教育委員会『二本木遺跡群Ⅶ』久留米市文化財調査報告書第291集 平成22年
- (7) 久留米市教育委員会『二本木遺跡群Ⅷ』久留米市文化財調査報告書第302集 平成23年
- (8) 久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅸ』久留米市文化財調査報告書第412集 平成31年
- (9) 久留米市教育委員会『へぼノ木遺跡 一第62次調査一』久留米市文化財調査報告書第121集 平成8年
久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第167集 平成12年
- (10) 注4文献と同じ。
- (11) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第8集』久留米市文化財調査報告書第58集 平成元年
- (12) 古代・中世の土器の分類と年代は、以下の文献に拠った。
松村一良「筑後国府跡の調査」(財)古代学協会『古代文化』第35巻第7号 昭和58年
山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器、陶磁器 一10～12世紀の資料(1) 本文編一」日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 昭和63年
- (13) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第5集』久留米市文化財調査報告書第45集 昭和61年
- (14) 久留米市教育委員会『昭和53年度東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』久留米市文化財調査報告書第21集 昭和54年
- (15) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第1集』久留米市文化財調査報告書第29集 昭和56年
- (16) 注13文献と同じ。
- (17) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第9集』久留米市文化財調査報告書第61集 平成2年
- (18) 久留米市史編さん委員会・編『資料編 考古』久留米市史第十四巻 久留米市 平成11年
神保公久「【資料紹介】久留米市山本町出土の縄骨器」福岡考古談話会『福岡考古』第18号 平成11年
- (19) 注4文献と同じ。



第32図 へぼノ木遺跡南東部・神道遺跡主要遺構図 (1/1,000)

報告書抄録

ふりがな	へぼのきいせき ーだい74じはっくつちょうさほうこくー							
書名	へボノ木遺跡 ー第74次発掘調査報告ー							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第434集							
編著者名	西 拓巳 (編)							
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9714 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2022年(令和4年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° "	東経 ° "	発掘期間	発掘面積	発掘原因
へボノ木遺跡 第74次調査	久留米市 ひがしあいの川 東合川 三丁目 257番1	40203	030145	33° 18' 48"	130° 33' 05"	20210419 ～ 20210529	258㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
へボノ木遺跡 第74次調査	集落	縄文 古代 中世	竪穴住居 ビット 埋甕 土坑 ビット 火葬墓 土坑	1基 1基 2基 3基 2基 1基 3基	縄文土器、弥生土器、 土師器、黒色土器、須 恵器、古瓦、陶磁器、 石製品、鉄製品	縄文時代の竪穴 住居を検出。		
要 約								
調査地点は、高良山からは派生した丘陵と段丘崖を経た低位段丘の上に位置し、へボノ木遺跡の南東隅にあたる。弥生時代中期後半の土器や古代の火葬墓、10世紀の土坑といった、これまでへボノ木遺跡で見つかった遺構や遺物を発見した。一方で、縄文時代の竪穴住居や埋甕といった神道遺跡で検出された遺構も検出し、神道遺跡とへボノ木遺跡の遺構が一連のものである可能性を示唆する。								
土木工事の届出日	令和2年8月13日				遺物の発見通知日	令和3年6月4日 (3文財第557号)		

へボノ木遺跡

ー第74次発掘調査報告ー

久留米市文化財調査報告書 第434集

令和4年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

福岡県久留米市城南町15番3

印刷 中村印刷株式会社

久留米市梅満町972